福岡市埋蔵文化財センター

令和元年度考古学講座「庚寅銘大刀の謎に迫る」

第6回
新聞記者の目から歴史を紐解く

西日本新聞社　古賀英毅

２０２０年1月１８日
@福岡市埋蔵文化財センター

【Ⅰ】新聞紙面ができるまで

１：記者の種類

内勤記者……校閲記者＝事実関係や語句など記事の間違いを見つける
整理記者＝価値判断、見出しやレイアウトを担当する。

外勤記者……第一報記者＝ニュースの本筋の記事を書く
専門記者　＝特定の分野の知識が豊富で解説や背景などを書く。第一報を記事にすることもある。

※歴史や考古学を長年取材する記者はごく少数。たまたま教育委員会などの部署を担当していることから取材することになる場合が大多数。歴史や考古学に興味はあっても苦手とする記者が大部分

２：紙面の種類

１面、社会面……編集会議で内容を決める＝紙面①②③④⑤など。通信社や友好社の記事も使用する
地域版　……担当部の外勤デスクが決める＝紙面⑮
文化面　……文化面担当デスクが決める＝紙面⑱⑲など
事業面　……事業担当部と相談して決める＝紙面⑥⑦

３：紙面採用のコツ

分かりやすいキーワード
……「最古、定説を変える」＝紙面⑧
……「金、お宝」＝紙面⑨
……「邪馬台国」＝紙面⑪
※吉野ケ里遺跡が大環濠集落であることは西日本新聞が

先に報じていた＝紙面⑩。しかし、その原稿には邪馬台国や魏志倭人伝という言葉はない。整理記者が飛びつきやすい、見出しが取りやすいキーワードをつくれば扱いは大きい＝紙面⑫

【Ⅱ】記事の作られ方

１：掲載面による違い

１面、社会面、地域版……記者が現場に足を運んで情報収集＝紙面⑬

……記者が現場以外で関係者から情報を得る＝紙面⑭

……現地説明会前触れ＝紙面⑮

……行政担当者からの中間報告＝紙面⑯

文化面の記事　……１面や社会面などの記事の深掘り＝紙面⑱―紙面⑰の不十分な部分を補う

……記者が興味を持つことについての深掘り＝紙面⑲

……時事的ではあるが「●●が見つかった」という形で書きづらい、展示会やシンポジウムの記事＝紙面㉑㉒

２：第一報記事を書く記者の特徴

・事象に「出くわした」という形で執筆する場合がほとんど。通常は行政や町の話題、事件などを取材している
・価値判断はできない場合が多い。専門部署（文化部など）と相談＝紙面㉓
・発表する側が談話を話す識者を準備している時もある＝紙面㉔

３：考古学・歴史担当記者とは

・おおよそ各社に１人程度。カバーする時代は旧石器時代から近代まで。日本だけでなく東アジア地域についても目を向ける必要がある
・同僚、社内からの諮問にすぐに対応できる知識やノウハウを持つ＝紙面㉕

・歴史的事象について、トレンドに流れるのではなく、さまざまな視点の見方を読者に提供する＝紙面㉖
・歴史や考古学に関する解説記事を書く＝紙面②⑤
・「A」という事象と「B」という事象を結びつけて「C」という視点を見つけ出す＝紙面㉗

↓

歴史・考古学担当記者は歴史的な事象についてさまざまな見方、考え方をチョイスしてブレンドし、一つの記事として提供するバーテンダーのようなもの＝紙面㉘

・普通の記事としては書くのは難しいことはコラムで紹介＝紙面㉙㉚
・識者へ寄稿原稿を依頼する＝紙面㉛

【Ⅲ】歴史・考古学担当者の「特ダネ」

・当然、「●●が見つかった」のようなものもある＝紙面⑬⑭
・研究者ではなくあくまで伝達者だが、埋もれた「真実」を明るみにっすることもある＝これは学術論文の執筆にも似た部分はある

土井ケ浜遺跡の「鵜を抱く女」の「鵜」の問題＝紙面㉜㉝㉞

愛国婦人会・奥村五百子の実像＝紙面㉟㊱㊲㊳㊴

歴史は現在の社会を考えるヒントを与えてくれる。だからこそ新聞には歴史や考古学の記事が必要だ。一つ一つの事象は歴史のロマンかもしれないが、それをつなげると今の社会の指針が見えてくるのではないか。